

あのお

心身ともに健康で、温かい思いやりの心もち、自ら学び自ら考える児童の育成
電話 641-6067 文責 校長 小野 浩

平成27年度「全国学力・学習状況調査」における穴生小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年4月21日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語,算数,理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1 教科に関する調査結果の概要

学力調査結果と分析

教科・区分	学力調査の分析(傾向や特徴)	学力の状況
国語 A	・全体的には全国平均値をやや下回っている。話すこと・聞くこと、書くことに関しては相対的にできている。 ・漢字の書き取りや文章理解に課題があり、内容をしっかりと意識しながら文章を読む習慣をつける必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている。
国語 B	・全体的には全国平均をやや下回っている。昨年度に比べると無回答率が増加している。 ・記述式の問題に対して課題がある。問題を把握し、回答となる文章をしっかりと書く習慣をつける必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている。
算数 A	・全国平均を下回っている。昨年度に比べると、無回答率がやや高くなっている。 ・数量関係については全国平均とほとんど差がない。	全国平均正答率との比較 下回っている。
算数 B	・全国平均をやや下回っている。ただし、全国平均に近づき、過去3年間の中ではもっとも正答率が高かった。	全国平均正答率との比較 下回っている。
理科	・全国平均とほぼ同等である。本市よりやや上回っている。 ・A区分物質とエネルギー分野は正答率が全国平均を上回っている。 ・B区分「地球と生命」の分野はやや下回っている。	全国平均正答率との比較 上回っている。

学校における学習状況に関する調査結果と分析

文章に書くことにおいては、昨年までの2年間、国語科の「書くこと」領域の研究に取り組んできた成果もあり、苦手意識をもつ児童が減ってきていることが分かる。また、自分の考えを授業中に発表する機会を取り入れることを意識して授業づくりを行った結果、発表に関しても苦手意識がなくなってきた。話し合い活動を学習中に多く取り入れることで、そのよさを実感している児童が増えている。

学校の授業で分からないことを「友達に尋ねる」と答える児童が多い。これは、友達同士で教え合う活動を取り入れている結果だと考えられる。

2 家庭生活習慣等に関する調査の概要

家庭生活習慣等に関する調査結果と分析

月～金までの学習時間が1時間以上の児童が少ない。同じく土日の学習時間が1時間以上の児童も少ない傾向である。チャレンジハンドブック等を活用し、自分で家庭学習の計画を立てさせて取り組んでいくことが必要である。また、家庭学習の習慣化を図っていく必要がある。

読書に親しんでいる児童は多く、読書の時間は全国に比較しても多い。継続して読書活動の推進を行う一方、読書の質的向上を視野に入れる必要性もある。

生活習慣等に関する調査結果と分析

将来の夢や希望をしっかりと持っている児童は全国よりも多い。過去3年ともに上回っている。

テレビやゲーム、インターネットを行う時間は全国と比べるとかなり多い傾向である。学校と家庭が協力して、「ゲームは1日1時間以内!」など、児童に意識させていくような声かけを積極的にしていく必要がある。また、本市の掲げる「ケータイ・スマホ夜10時 F.F」についても、声かけを続けていく。

あのお

心身ともに健康で、温かい思いやりの心もち、自ら学び自ら考える児童の育成
電話 641-6067 文責 校長 小野 浩

3 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

教科に関する取組

学校全体で、国語科の「読むこと」単元において、登場人物の心情の変化を細かく読み取る授業場面を増やす。また、「書くこと」単元においても、サンプル文における筆者の考えを読み取る授業場面を増やす。その際、まずノートに自分の考えを書き、それを学級全体で交流させ、考えを深めさせるようにしていく。

学校全体で、算数科において授業研究を中心として、児童の基礎・基本の定着を図る授業づくりを目指す。「つかむ」「みつける」「ねりあげる」「つかう」「まとめる」段階で手だてを講じるようにし、児童の自ら学ぶ力を高めていく。

算数科を中心として低学年・高学年を分けて、給食準備時間の補充学級を開始する。校長、教務主任、少人数担当教員を中心として行う。

家庭生活習慣等に関する取組

ここ数年、家庭学習の時間が1時間以内の児童が多く、家庭の教育に関する意識が薄い傾向がうかがえる。

1・2年生は30分、3・4年生は45分、5・6年生は1時間以上、家庭学習を行うように啓発していく。

学年に応じて自主学習ノートを活用し、自ら学ぶ力を高めていくようにする。よりよい学びになっているノートを廊下等に掲示し、自主学習に対する意欲を高める。

家庭学習の計画を立てる際に、家庭学習チャレンジハンドブックを活用する。各学級担任が児童一人一人の家庭学習の状況を把握し、実態に応じて助言を行い、時間の確保や質の向上を目指す。